

うぐいすの内裏だいり 山形県

むかし、あつたけど

むかし、あるところに、お茶屋がありました。そのお茶屋へ、きれいな姉あねさんが、毎日のようにお茶を買いにきました。毎朝、五文もんずつ買っていきます。番頭ばんとうさんは、どうして毎朝毎朝お茶を買いに来るのだろうと、ふしぎに思っていました。そして、あるとき、こっそり姉さんの後について行きました。長いこと野原を歩いて、林の中に入っていくと、りっぱな御殿ごてんがありました。番頭さんが、

「こんにちは、こんにちは」といって入ると、姉さんがひとりでお茶を飲んでいました。姉さんは、

「おやおや、番頭さん、よくいらつしやいました。早くお上がりください」といって、お菓子かしだの、おもちゃだの、どっさりごちそうしてくれました。

しばらくすると、姉さんは、

「わたしは、ちょっと用達ようたしに出ますけれど、あなたは留守番るすばんして遊んでいてください」といいました。そして、出かけるときに、

「となりの間は、十二座敷さしきだから、けつして見てはいけません」と、かたく断ことわって、出て行きました。

ところが、姉さんが行ってしまうと、番頭は、こっそりとなりの間を開けてみました。

そこは、お正月の座敷でした。床とこの間まには、松竹梅をかざって、鏡餅かがもちやらエビやら、こんぶ、橙だいだいやらをあげてあります。子どもたちは、みんな赤い着物を着て、甘酒あまさけを飲んでいました。

つぎの間は、二月の座敷でした。初午はつごまで、お稲荷いなりさんの赤い鳥居とりいが並んで、おおぜいの人がお参りしていました。いろいろのおもちやを売る店がたくさん出ていました。

そのつぎの間は、三月の座敷で、ひな祭りです。お内裏だいりさんや、五人囃子ばやし、はとぼつぽの笛や、犬の子や馬の子の人形。おもしろい物づくしです。

そのつぎの間は、四月の座敷で、花祭りです。花御堂はなみどうがあつて、甘茶あまちゃの中に生まれたばかりのおしゃかさんが、天にも地にもわれひとりといって、立っていらつしやいます。

そのつぎの間は、五月の座敷です。端午たんごの節句せつくで、こいのぼりがたくさん泳いでいました。よろいかぶとやら、鉾ほこやら、なぎなたやら、武者人形むしややらを飾かざってあります。ち

まきやかしわ餅^{もち}などおいしいものがいっぱいありました。

そのつぎの間は、六月の座敷です。齒固^{はがた}めで、氷^ひもちを食べていました。お山参りの人たちは、大きな梵天^{ぼんてん}をかついで通ります。

そのつぎの間は、七月の座敷です。七夕^{たなばた}さんと、青竹に金銀五色の短冊^{たんざく}をつるして、うりやらもやらをそなえて、星祭りをしていました。十三日はお盆^{ぼん}で、人びとが花やお供え^{そな}を持ってお墓参^{はかまい}りに行っていました。そして、あちらの村でもこちらの町でも、鎮守^{ちんじゅ}さんのお祭りで、どんど、どんど、太鼓^{たいこ}の音がするやら、獅子舞^{ししまい}やら村芝居^{むらしばい}やらでおおさわぎです。

そのつぎの間は、八月の座敷です。月見の座敷で、だんごや、ぼたもちや、すすきを供えています。こおろぎかごをつるして、里芋^{さと芋}を食べてお酒を飲んでいました。

そのつぎの間は、九月の座敷。刈^かり入れ時だから、お百姓^{かみ}たちはてんてこ舞^まいしています。けれども、十三夜になると、あとの名月で、くりをゆでたのや、青豆などのごちそうがならんでいます。

そのつぎの間は、十月の座敷。遠い山々は雪をかぶって、庭の木の葉は、ひらひらひらと風に吹き飛ば^ふされていました。けれども、村の家々では、新しいおもちで、お腹^{なか}がいっぱいです。

そのつぎの間は、十一月。恵比寿講^{えびすこう}。鮭^{さけ}がうんととれて、ごちそうがならぶけれど、毎日毎日雪ばかり。

そのつぎの間は、十二月。お正月のしたくで、おもちをついたり、魚を買ったり、すす掃^はきたり。うんといそがしいから、子どもたちはみんなじやまにされて、こたつに入^はって、昔語りをしたりして遊んでいました。

そのとき、いきなり、ホーホケキョと鳴く声がありました。番頭さんがびっくりしてあたりを見ると、座敷も御殿もなんにもなくて、もとの林の中でした。

これは、うぐいすの内裏^{うちら}といって、なかなか人の行けない所だそうです。

村上郁再話

資料『昔話研究2』民間伝承の會